象徴形式としてのスポーツの構造論的研究： その生成，機能，発展を中心にして

河 野 清 司¹⁾

A study of the structure of sport as a symbolic form: Centered on its generation, function, and development

Kiyoshi Kono¹

Abstract

The purpose of this study was to identify the various unique characteristics of sport as a culture, with respect to the 1) generation, 2) function, and 3) development of its structure. In order to analyze the above aspects, the general cultural categories which have been demonstrated in language research were adapted as methods, since such categories have a definite effectiveness for analyzing as yet unfamiliar cultural aspects of sport. In this study the following points were clarified:

1) Sport is manifested as individual play or performance (corresponding to *la parole* in language). However, in order to play, sport needs to have an objective and universal structure (corresponding to *la langue* in language) which organizes physical activities for a specific competition, and in turn gives definite meaning to the activities. So sport exists when each sport, such as soccer or volleyball, is established as such a system (sport structure) and presented to the athlete as an object (*Gegenstand*) to play.

2) Sport structure consists of movement forms, rules, and values. These elements give a certain form to human potential physical abilities and self, and thus make it possible for a human to express (*ausdrücken*) his abilities and himself to the greatest extent. From this viewpoint, sport carries symbolic function.

3) Sport develops in a self-accumulating manner by converting the physical and mental abilities demonstrated by players and coaches in play into skills, strategies, records, training methods, etc., and incorporating them into its own structure.

Considering the above, it can be concluded that in having such a structure, sport plays its own cultural role as a symbolic form, which symbolizes the ever-developing physical potential of the humans who participate.

Key words: *la langue*, *la parole*, sport structure, symbolic function, self-accumulation

(Japan J. Phys. Educ. 42: 128-141, September, 1997)

キーワード：ラング，パロール，スポーツ構造，象徴
機能，自己累積性

緒 言

人間の特徴的な活動として，言葉を話したり，

絵を描いたり，踊ったりすることなどが上げられる．これらの人間的な活動を可能にしているのが，言語，神話，宗教，芸術，科学などの人間独自の文化形式である．スポーツもこれらと並ぶ人間的な活動形式の一つであると考えられる．なぜ

1) 筑波大学体育科学研究科
〒305 茨城県つくば市天王台 1-1-1

1. Doctoral Program in Health and Sport Sciences, University of
Tsukuba, 1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki (305)

ならば、生存には全く関係のない白球をめぐる真剣にプレイされる野球のような競い合いは、動物には存在しないと考えられるからである。

さて、この「文化としてのスポーツ」というテーマをめぐるさまざまな議論が行われてきた。これに関して高松²⁷⁾ (p. 18) は、スポーツが文化であると盛んに主張されるようになったのは1960年以降であり、そこでは、芸術、宗教、科学よりも劣ると意識されていたスポーツの価値を高めることに重点が置かれてきたことを報告している。また佐藤²²⁾ (p. 7) および高松²⁷⁾ (p. 18) は、この結果として、スポーツの文化論的研究が、それに付随する「健康」や「社会福祉」といった価値を数え上げることで他の文化領域に対する順位の向上を図ろうとする「価値階層論」を中心に展開されてきたことを指摘している。

しかし、われわれは、スポーツと他の文化を階層的に序列化し、一方が他方より優れているとか、劣っているというような価値判断を下すべきではない。なぜならば、それぞれの文化は他と交換することのできない固有の文化的特質を備えているからである。したがって、スポーツ文化論の現代的な課題は、スポーツに対して価値論的アプローチを試みるのではなく、他の文化との違いに着目した「差異論的アプローチ」(佐藤²²⁾ p. 7)を試みることによって、「スポーツという文化の独自性」を明らかにしていくことにあると考えられる。

それでは、スポーツを他の文化との差異の中で論じていくには、どのような戦略を用いればよいのであろうか。これに関してカッシーラー²⁾は、言語、神話、宗教といった人間文化が一体何であるかを知るには、それらの歴史のおよび社会学的条件を提示するだけでは十分ではなく、それらの文化を支えている一般的な構造原理を記述的に分析することが重要であると論じている。この指摘は文化の種概念であるスポーツにも妥当すると考えられる。例えば、1891年にバスケットボールというスポーツが誕生したことは歴史的事実として報告されているが、それがスポーツと名付けられるようになった背景には、それを他の文化から

区別するスポーツ独自の構造の生成があったからと仮定されるのである。つまり、スポーツという文化が一体何であるかを知るには、その歴史的条件や社会的条件だけでなく、スポーツをまさに独自の文化としているその構造自体の生成を明らかにすることが必要なのである。ただし、スポーツと他の文化の差異は、その構造だけにとどまらず、その構造が担っている機能および発展の仕方にもまよっていると考えられる。したがって、スポーツの構造だけでなく、その機能と発展を連続した視座のもとに把握することによって、スポーツの独自性がより明確にされることが考えられるのである。そこで本研究では、スポーツという文化の独自性を解明するという現代的な課題に対して、スポーツの構造とその機能および発展という側面から、一つの試案を提示することを目的とする。

1. 先行研究の検討

ここでは、これまでに行われてきた数多くのスポーツ研究の中から、スポーツの生成、機能、発展を主題とするものを取り上げて整理し、検討していくことにする。

(1) 日常運動起源論的立場

まずスポーツの生成に関する理論として、Franke⁴⁾の理論を上げることができる。彼は日常の世界の中で行われている運動形態をモデルにしたスポーツの生成論を展開している。彼によれば、スポーツは日常の身体運動の上に人為的なシステムが構築されることによって成立することになる。

まず彼は、日常の目的—手段関係 (Zweck-Mittel-Relation) の中に組み込まれ、日常的な意味を帯びている一般的な身体運動をスポーツの原型として定立し、これを一次システムと名付けている。彼によれば、スポーツは、われわれがこの一次システムの中から運動自体を取り出し、それに特定の指標と新たな意味を与え、人為的な二次システムを創り出すことによって成立することになる。その指標とは、「自己目的性 (Reflexivität)」^{註1)}、「空間—時間」であり、新たな意味

とは、スポーツ・ルールによって付与される人為的な意味である。つまり、スポーツ（例えば「走り幅跳び」）は、まず個人的かつ歴史的な文脈の中で行われている身体運動（例えば「跳ぶ」という運動）がその文脈から分離され、特定の空間（例えば「陸上競技場」）の中で、それ自体のためにプレイされることによって、そしてまた、それぞれの跳躍に新たな意味（例えば決勝「最初の」あるいは「最後の」といった意味）が与えられることにより成立すると考えられている³⁾。

確かに、やり投げのように、日常生活の中で行われていた運動形態がデフォルメされたり、再構築されることによって成立したと考えられるスポーツ種目も存在している。しかし、この理論では、それ以外の数多くのスポーツの成立を説明することは困難である。なぜなら、アメリカンフットボールやバスケットボールなどのスポーツは、それ以前にその原型となるべき運動形態を日常の中にもっていないからである。

(2) 「スポーツ＝社会モデル」論的立場

次にスポーツの機能に関する理論としては、Gebauer も指摘しているように、その象徴機能に着目した研究が行われている（Gebauer⁷⁾ S. 344）。これらの研究によれば、スポーツはそれ以外の世界を目に見える具体的な形で映し出す象徴として機能している。

例えば Rigauer²¹⁾ は、スポーツが産業社会の象徴として機能していることを指摘している。彼によれば、記録の達成、競争化と専門化、達成能力と社会的プレステージの相関関係などは、スポーツが達成原理に支配されている産業社会をまさに複写していることを意味している。また Metheny¹⁸⁾ は、スポーツが当該の人物や時代の象徴として機能していることを指摘している。彼女によれば、中世の時代に行われたトーナメントは騎士の卓越の象徴であり、近代のボールゲームは大衆や時間を巧みに支配しようとした紳士の象徴であり、機械を使用して行われているニュー・スポーツは、テクノロジー時代の象徴である。

このように、スポーツの機能として、象徴的な機能があることが指摘されている。ただし、ここ

でいわれている象徴機能とは、実はスポーツが有する「記号」的な機能にはかならない。つまりスポーツは、それ以外の世界の観念やイデオロギーを指し示す記号として機能することができるということである。しかし、スポーツがそれ以外の世界の象徴として機能するのは、Gebauer も指摘しているように、競技中の行為とそれによって明示される別の事柄が関係づけられてしまうところにその原因がある（Gebauer⁷⁾ S. 344）。ただし、このような機能は、スポーツ以外の音楽や絵画においても働く機能であり、したがってスポーツにとっては二次的な機能と名付けられるべきものであると筆者は考えている。

しかし、スポーツの機能はこのような機能に尽きるわけではない。むしろスポーツには、100メートル競技のごとく、他の文化領域では発揮されない能力を競技者が最大限発揮してしまうような機能が備わっている。このような機能を先に示された機能と区別するためにスポーツの一次的機能と名付けることができるであろう。スポーツの機能を明かにするためには、まずこの一次的な機能を明らかにする必要があると考えられる。

(3) 歴史社会的立場

スポーツの変化・発展に関する研究として、時代精神や物質的条件にその原動力を求める研究がある。まず、特に世界観の変化からスポーツの変化・発展を考察している研究として、グートマン⁹⁾の研究を上げることができる。彼は、近代スポーツが生みだされてきた背景に、近代以前の世界観とは異なる、経験主義的、実証主義的、数学的世界観の発展があったことを指摘している。同様に稲垣¹²⁾は、前近代の伝統的民衆娯楽が近代スポーツへと変容していく過程には、それ以前の時代精神とは異なる、「近代合理主義」という新たな時代精神が大きな役割を果たしていたことを明らかにしている。この近代合理主義の精神とは、効率主義に基づく「競争原理」「達成原理」「数量的管理の原理」であり、近代スポーツはこのような精神に支えられて展開されるようになったと考えられている。この例として、スポーツの規格化、技術化、専門化、数量化、方法化、合理化、

ルール化などが上げられている。さらに稲垣¹³⁾は、近代スポーツと並んで、「生涯スポーツ」や「ニュースポーツ」あるいはヨガなどの「癒し」を求める身体技法などが台頭するようになってきた背景に、「競争原理」や「勤勉のエートス」といった近代の精神から「共生(コンビビリティ)」という後近代の時代精神への移行を読み取っている。このような新たな時代精神に導かれることによって、今後スポーツは、近代スポーツと後近代のスポーツが並立するような二極化あるいは多極化に向かって発展していくと考えられている。また、寒川²⁶⁾も、近代スポーツだけでなく、ニュースポーツ、民族スポーツ、生涯スポーツといったさまざまな形のスポーツ文化が並存している現在の状況の背後に、近代スポーツを相対化するような成熟した時代の変化を読み取ろうとしている。

特に稲垣が述べているように、スポーツは確かに時代精神や理念型といった絶対的精神に導かれて変化・発展していく側面をもっている。しかしスポーツは、ひとたび生みだされると、それを生みだした社会や人間から相対的に自立し、さまざまな人間によってプレイされ、われわれの想像もしなかった方向に変化・発展していることも事実であると考えられる。したがって、スポーツの変化・発展は、人間が生みだしたスポーツとそれをプレイする人間の能力との関係から論じられることも必要であると考えられる。

(4) 唯物論的立場

さらに、スポーツの変化・発展に関する研究として、伊藤の研究を上げることができる。先の稲垣がスポーツの変化・発展を特に時代の精神から論じていたのに対し、伊藤はそれを物質的な側面から論じている。伊藤¹⁴⁾によれば、スポーツは①プレイ(場面)、②組織、③物的・社会的条件から構成されており、その上層に位置するプレイは、施設、賃金、余暇などの物的・社会的条件を基盤にして発展している。賃金や余暇は、生産力の発展と関係しているので、プレイはそれを取りまく社会に規定されて発展すると考えられている。また内海³⁰⁾は、生産関係と生産力を下部構

造、スポーツをその上部構造とした上で、スポーツが下部構造を構成している生産関係と生産力に依存しながら発展していることを論じている。

確かに、生産力の発展がスポーツの発展を規定していると考えられることもできる。しかし、特定の道具や施設がスポーツを発展させたというよりも、スポーツ自体が自らを発展させていく中で特定の道具や施設を選択してきたと考えるべきである。例えば、プロ野球が現代の生産力の産物である金属バットを使用しないのは、まさにそのスポーツ自体の中に自らの発展の仕方を決定する構造があることを意味している。また、初期のバレーボールと現代のそれを比較すれば明らかのように、スポーツ自体、日々発展しているが、この発展の在り方は、経済領域における生産力の発展法則だけに還元することはできないのである。

2. 研究の課題と方法

スポーツの成立、機能、発展に関するこれまでの代表的な研究を検討した結果として、次の点を指摘することができる。これらの研究は、それぞれ異なった側面からスポーツにアプローチしているのであるが、スポーツをそれを取りまくさまざまな要素から規定しているという点では一致している。それらの要素とは、スポーツ生成のモデルとされる既存の身体運動、スポーツを通して映し出される労働の世界、スポーツの発展を規定しているとされる時代精神や物質的な生産力である。つまりスポーツは、それ以外の世界の原理に規定されながら、生成、機能、発展している活動形式ということになる。しかし、スポーツの生成を既存の身体運動から論じることには限界があるし、また、例えば初期のバレーボールから現代のバレーボールまでの発展を考えてみても、スポーツは物質的な生産力の発展法則だけでは還元できない独自の発展をしている。したがって、ここで問われるべき課題は、スポーツという文化の生成、機能、発展をそれ自体の内在的な構造に則して明らかにしていくことである。

さて、上記の課題を解決していくためには、スポーツという文化を分析するに相応しい分析装置

を必要とするが、ここでは、文化の一つである言語を研究する中で明らかにされてきた一般的な文化概念を分析装置に据えることにする。もちろん、言語とスポーツはそれぞれ固有の文化領域を構成しており、単純に比較できるものではない。ただし、言語とスポーツは、どちらも人間が社会生活を営む中で生みだしてきた人為的・社会的な産物であり、それを利用する人々の行為を方向づけるとともに、その行為の中で獲得された新たな経験を自らの中に組み入れていくことで発展している文化形式である、という点では共通している。つまり、言語とスポーツは、その根底において、文化としての一般的な構造を共有しているのであり、言語を深く探究していく中で明らかにされてきた一般的な文化概念は、まだまだ未知の部分の多いスポーツを分析する場合にも一定の有効性をもっていると考えられる。したがって、樋口¹⁰⁾や多木が試みているように、言語研究の中で明らかにされてきた既知の文化概念を基盤にして未知のスポーツという文化を分析していくという方法論(多木²⁹⁾ p. 110)をここでも利用することによって、スポーツという文化を構成している構造の生成、機能、発展の仕方を分析していくことが可能であると考えられる。そこで研究の手順として、言語研究において明らかにされてきた文化概念の中から、文化構造の生成、機能、発展に関する一般的に認知された概念をまず提示し、次にその概念を用いて、スポーツの構造の生成、機能、発展に関する内在的原理を明らかにしていくという段階を踏むことにする。

第1章 スポーツ構造の生成

1. ラングとパロールの相互規定性

われわれが話したり、演奏したり、スポーツをしたりする行為、つまり文化的な行為は、そもそものようにして成立しているのであろうか。ここではその条件を文化領域の一つを構成している言語をもとに考えてみたい。

まず、言語活動は、各個人が話したり、書いたりする行為として現象している。しかし、言語はこの次元だけで存在しているのではない。例え

ば、“I speak Japanese.”という英文が示しているように、個人の具体的な発話行為が成立するためには、それらの行為の背後にあって、それらに一定の意味を与えている Japanese (日本語) という特定の言語を必要とするのである。われわれが通常、日本語、英語、ドイツ語という名前で呼んでいる言語は、それらを話す当該の人々が集団生活を営む中で生みだしてきた人為的・社会的な制度として存在している。ソシュール²⁴⁾は、この制度としての言語に対し「ラング」という名辞を、このラングを通して行われる各個人の発話行為に対して「パロール」という名辞を与えるとともに、二つを峻別している。つまり、話すという文化的な行為は、このラングとパロールの相互作用によってはじめて成立すると考えられるのである。

ところで、個人の発話行為の前提であるラングは、音韻体系、文法体系、意味体系などが一つのシステムとして有機的に関連づけられた客観的な構造(体系)を成している。この構造は、日本語という特定のラングで考えれば理解できるように、日本語に関する発話行為ならば無限に産出するが、日本語以外のそれは何ものも産出しないという諸規則の体系を成している。“thinking in Japanese”という英文が示しているように、特定の言語(ラング)を話すということは、単に言葉を発することではなく、そのラングによって形式化された世界の中で、感じ、考え、行為することを意味している。

このように、文化的な活動は各個人の具体的な行為によって現象するが、それが成り立つためには、諸個人の行為に意味を与えている客観的で普遍的な構造(ラング)が、諸個人からは独立した自律的な体系として確立されていなければならないのである。

2. スポーツ構造とプレイ

一般的な文化概念として提示されたラングとパロールという概念区分は、スポーツの生成を考察する上でも有効である。

言語が各個人の発話行為であるパロールを通し

て初めて現象するように、スポーツもまた各個人のプレイを通して初めて現象する。われわれが目の中で見ているスポーツは、ある競技者が走ったり、跳んだり、投げたりしてプレイしているスポーツ現象の次元である。この次元の特徴は、その一回性と個別性という点にある。スポーツの中で行われたプレイは、二度と繰り返されることはない。あるスポーツの中で行われたプレイが記録映画として映像的に再現されたとしても、プレイ自体はまさに一回限りの現象である。もし過去に行われたプレイがただ再現されるだけというのであれば、それはスポーツとは別のものになってしまうであろう。さらにプレイは、競技者の身体能力の違いによっても多様な形で現象する。例えば、一流競技者によって行われる野球のプレイと子供によって行われる野球のプレイの間には、大きな違いが見られるのである。

しかし、スポーツは、スポーツ現象の次元だけで成り立っているのではない。確かに、プレイの世界は一回的であり、また個別的なものであるが、昨日行われたプレイと、今、目の前で展開されているプレイが、例えば同じサッカーとしてわれわれに認識されるのはなぜだろうか。また、子供と一流競技者のプレイの質的違いにもかかわらず、それらが同じ野球として理解されるのはなぜだろうか。それは、プレイの世界がいかに多様で個別的なものとして立ち現われようとも、それらを特定のスポーツとして統括し、意味づけている客観的で普遍的な構造が存在しており、われわれがそれらを共有しているからなのである。

例えば Gebauer は、走り幅跳びに関し、「走り幅跳びというもの (Ein Weitsprung) は、着地の後も消えることはない。4 年前にプレイできた走り幅跳びが、現在でも生きつづけている」(Gebauer⁵⁾) と述べているが、これは走り幅跳びというスポーツが、個人の能力とともに消滅する一回的で個別的なプレイとしてだけでなく、そのようなプレイを限りなく産出させていく普遍的で客観的な構造としても存在していることを意味している。つまり、走り幅跳びというスポーツは、できる限り遠くに跳ぶことに関しては、有限かつ

個別的なプレイを無限に産出するが、それ以外のことに限っては、何も産出しないか、あるいはむしろ禁止する体系化された構造として存在しているのである。それぞれのスポーツが他と交換することのできない独自のプレイとして立ち現われてくる背景には、このような独自の構造の存在があると考えられる。

このように考えるならば、それぞれのスポーツは、一回的で個別的な現象であるプレイを統括し、それに一定の意味を与えている客観的で普遍的なスポーツ構造 (言語におけるラングに相当) と、それを媒介にして行われる個別的で有限的なプレイ (言語におけるパロールに相当) との相互作用によって、はじめて成立する行為であるといえよう。

3. スポーツ構造の独自性

それでは、プレイの前提であるスポーツを構造として把握する場合、それはどのような契機から構成され、どのような特性をもっているのだろうか。

言語学の概念を用いてスポーツを分析している多木によれば、スポーツ (筆者の言葉で言えばスポーツの構造) は、コードの束によって構成されている。彼が使用しているコードという用語はルールを意味しているので、スポーツを構造として把握する場合、それはルールによって構成されていることになる。このルール (コード) は、「ゲームの持続する時間、ゲームの行われる空間の限定、選手の数、勝敗が決まる方法など、ゲームの成立と進行を決めるいっさいのものを含んでいる」(多木²⁹⁾ p. 116) とされている。

確かに、スポーツを構造として捉えた場合、スポーツ・ルールはその重要な契機であると考えられる。しかし、スポーツ・ルールだけをその構成契機とするならば、スポーツは将棋と同じ構造をもつことになる。なぜなら、将棋もまたスポーツと同様に、それが遂行されるための空間、対戦者の数、勝敗の仕方などをルールによって形式化しているからである。

この問題を解決するために大きな示唆を与えて

くれるのが、佐藤によって提示された「スポーツ構造」という概念である。彼は、われわれの目に運動として映じている「スポーツ現象」と、その現象の背後にあってそれをまさにそのように生起させている「スポーツ構造」とを峻別した上で、そのスポーツ構造を「身体的契機」「知的契機」「感性的契機」のそれぞれが有機的に関連しあいながら自律的に存在している複合的構成体として規定している（佐藤²²⁾ p. 10）。彼のスポーツ構造は、スポーツ一般の構造を意味しているが、この構造概念は各スポーツの構造を解明するためにさらに展開されるべきものであるといえよう。

例えば野球には、まさに野球をそれとして特徴づけている「バッティング」や「ピッチング」といった独自の運動様式が存在している。身体的契機の一つであるこれらの運動様式は、それをプレイする各人の身体能力、知力、精神力をそれらに向けて統合させるような客観的な形式として、野球というスポーツの構造の一契機を成しているのである。

次に、この運動様式をまさにそれとして生みだしているのが、知的契機の一つであるスポーツ・ルールである。先に示された「バッティング」という運動様式を生みだしているのは、「ピッチャーの投げたボールをバットで打ち返す」というスポーツ・ルールである。したがって、スポーツ・ルールと運動様式は相互規定的な関係にあるといえよう。

さらに、このスポーツ・ルールの形式を規定しているのが、感性的契機の一つである価値観である。これに関して多木は、アメリカで生まれた野球の形式には、チーム・スポーツであるのに個人の活躍が目につくようにつくられていること、またその背景には英雄を好むアメリカ人の姿があったことを明らかにしている（多木²⁹⁾ p. 83）。つまり、ピッチャーとバッターの直接対決を可能にしている野球のルールは、それを生みだしたアメリカ人の価値観によって規定されていると考えられる。

このように、スポーツをその構造という視点から把握するならば、スポーツはある個人や集団か

ら生みだされたスポーツが、佐藤によって提示されている自律的な構造（スポーツ構造）を有するようになり、その生みの親である人間から独立して存在するようになったとき、またその構造に基づいて、特定のプレイだけが淀みなく、しかも繰り返し産出されるようになったとき、成立すると考えられる。例えば1891年という年は、バスケットボール自体が一つの有機的で自律的な構造（システム）を有する対象物として確立され、その生みの親であるネイスミスから独立して存在するようになったという意味において、バスケットボールが誕生した年なのである^{注2)}。

ここでは、スポーツの生成をスポーツ構造の自律化および産出者からの独立という視点から捉えていくことの有効性が論じられた。ただし、スポーツ構造は何か静的で固定されたものとして理解されるべきではない。つまり、ひとたび生みだされたスポーツが、それをプレイする競技者に対してどのような機能を担っているのか、またそれをプレイする競技者との関係の中でどのような変化・発展をしているのかが、このスポーツ構造という概念をスタートラインにすることでさらに明らかにされなければならないのである。

第2章 スポーツの機能

1. 文化の象徴的機能

各文化はどのような機能を担っているのだろうか。これに関して Cassirer¹⁾は、言語、詩、造形芸術、宗教などの各文化形式が、さまざまな人間能力の表出を可能にしていることを指摘している。つまり、各文化は、それぞれの構造ごとに、独自の人間能力の表出を可能にしていると考えられる。ここでは、文化構造体の機能をよりわかりやすく論じるために、言語と同様に体系づけられた構造をもっている将棋を例にして考察を進めていくことにする。

まず将棋は、さまざまな駒を用いることによって行われる。この駒の中には「王」や「桂馬」などがあるため、将棋の中に実際の戦いをコピーし、再現する象徴的な機能を見い出すことも可能である。しかし、われわれは、実際の馬や王を思

い浮かべながら将棋を指しているわけではない。将棋には現実世界の単なる再現以上の積極的な機能が備わっていると考えられる。

むしろ将棋の機能は、その指し手に対して、他の世界では開示されることのない独自の能力を発揮させるような一つの世界を築き上げていくところにある。これを可能にしているのが将棋の規則体系、つまり将棋の構造（ラング）である。この構造は「将棋全体を支配する関係性の網の目」（丸山¹⁶⁾）を成しており、この人為的な関係性によって生みだされる空間（将棋盤）、用具（駒）、駒の力関係、その運用方法などは、人間の知的能力に一定の形式を与えることで、それを表出および発揮させる機能を果たしている。例えば、将棋の対戦において自分の「王」の前に指された対戦者の「金」は、机の上に置かれた単なる駒とは異なり、他の世界では表出されない特定の知的能力を結集し、それを発揮することで阻止しなければならない対象に変貌しているのである。このように、将棋を指すことを通してしか発揮されない特定の知的能力を表出させていくところに将棋独自の機能があるといえる。

このように考えるならば、それぞれの文化を構成している構造は、われわれの中に漠然とした状態で潜んでいる能力にそれぞれ独自の形式を与え、それを積極的な形で表出させていくという意味で、象徴的な機能を担っているのである。

2. スポーツの象徴的機能

それではスポーツはどのような機能を担っているのだろうか。ここでは、前節で提示された象徴という概念を視座にしてスポーツの機能を考察していくことにする。

先行研究において論じられたように、スポーツにおいても象徴的な機能があることが指摘されている。ただし、象徴という言葉にはすでに指摘されたような伝達あるいは指示とは異なる意味が含まれている点に注意しなければならない。これに関して Gebauer⁶⁾は、これまでのスポーツ論の中で述べられてきた象徴的な機能が「再現機能（Darstellungsfunktion）」を意味していることを

述べた上で、それとは意味の異なる「表出機能（Ausdrucksfunktion）」にスポーツの象徴的な機能を見い出している。確かに、前述の Rigauer などは、A という対象（ここではスポーツ）がそれ以外の B という対象（産業社会）を伝達あるいは代行・再現（representation）するという意味で、スポーツの機能を把握してきたといえる。しかし、競技者自身は、何かを再現するためにプレイしているわけではない。これに対し高松は、スポーツもカッシーラーがいうところの象徴機能、つまり単なる現象の存在に意味を与え、それを表出する多様かつ可変的な機能を担っていることを指摘している（高松²⁷⁾ p. 23）。ここではカッシーラーや高松が提示している表出という概念をわれわれの身体能力と自己の表出という視点から考察していくことにする。

人間は本来、鳥のように高く飛ぶことはできないし、チーターのように速く走ることもできない。しかし、それにもかかわらず、陸上競技の中の「走り高跳び」という活動形式や、「100メートル」という活動形式を通してプレイすることによって、高さや速さに対する身体の可能性を拡大してきたのである。これらの形式は、現時点において、人間が最も高く跳んだり、最も速く走ったりすることを可能にしてくれる唯一の活動形式である。このように、スポーツには、原型の形で存在している人間の身体能力を、比較級や最上級に変えて表出させる象徴的な機能があると考えられる。

さらにスポーツは、身体能力だけでなく、競技者の自己をも象徴化している。スポーツは、選手の人種、国籍、社会的地位、兄弟関係を無効にすることで、「自己の実存が姿を現はす」（今道¹¹⁾）世界を構築している。例えば、サッカーにおいて、敵のゴール前にいる自分にパスされたボールをシュートすることを通して表出されるのは、「自分のシュートでゴールを決めることができた自己」あるいは「それを決められなかった自己」のどちらかである。

このように、スポーツはそれをプレイする人間の中に潜んでいる身体能力や自己を最大限表出さ

せることができるという点で独自の機能をもっており、まさに人間の「内なるものを外に見出す意味で深い象徴」(中井²⁰⁾ p. 413) として機能していると考えられる。

3. スポーツ構造と身体能力の象徴化

前節では、スポーツの機能が、再現的な機能にあるのではなく、われわれの中に秘められた身体能力を積極的な形で表出させていく象徴的な機能にあることが論じられた。それではスポーツはどのようにして人間の身体能力を象徴化しているのだろうか。ここでは、すでに論じられたスポーツ構造との関係の中でこの問題を考察していくことにする。

さて、スポーツ構造を構成している各契機は、人間に共通する身体能力の一部を抽象し、それに特定の形式を与えることで、その能力の表出を可能にしていると考えられる。まず、スポーツ構造の一契機である運動様式は、まさに人間の潜在的な身体能力に一定の形式を与え、それを積極的な状態に転化させていると考えられる。例えば、サッカーというスポーツを独自のものにしている「ヘディング」や「ドリブル」という運動様式は、ボールを頭や足で操作することに関する能力の表出を可能にしている。これは、サッカーというスポーツがそれらの能力を競技者に対して発揮させるような世界を構築することに自らのアイデンティティをおいているからである。

また、スポーツ構造の一契機であるスポーツ・ルールも、人間の身体能力に特定の形式を与えていると考えられる。スポーツ・ルールによって生みだされる用具は、プレイの外ではほとんど意味をなさないが、それらはプレイの中では大きな意味をもつことになる。例えば、走り幅跳びや走り高跳びの世界を構成している踏切板やバーは、有機的な人間が遠くに跳んだり、高く跳んだりする身体能力に形式を与え、それを積極的な形で表出することを可能にしている。もしこれらのスポーツによって身体運動に一定の形式が与えられるのであれば、人間の中に存在している潜在的な能力の一部は永遠に表出されないままに終わるであ

ろう。また、スポーツ・ルールは、単なる「物理的間隔 (Abstand)」が「存在的距離 (Entfernung)」²³⁾に変換されるようなスポーツ空間を設定することで、特定の身体能力の表出を可能にしている。例えば、サッカーのルールによって構成されたゴールエリアという人為的空間は、そこでプレイが行われるとき、単なる物理的な空間から実存的な空間へと変化する。自陣のゴールエリアの中にパスされた敵のボールは、机の上に置かれたボールとは異なって、自分の身体能力を結集し、追い付き、自分の実存をかけてゴールを阻止しなければならない対象に変貌しているのである。

さらに、スポーツ構造の一契機である価値観も、感性という側面から表出されるべき身体能力に一定の形式を与えていると考えられる。例えば、ヨーロッパ型のサッカーと、南米型のサッカーが存在する背景には、それをプレイする国民の価値観や好みといったものが、表出される身体能力に一定の形式を与えていることを示している。

このように、スポーツ構造を構成している運動様式、スポーツ・ルール、価値観の各契機は、われわれの身体能力にそれぞれ独自の形式を与えることにより、われわれの中に漠然とした状態で存在している身体能力を象徴化しているのである。

第3章 スポーツの発展

第2章においては、スポーツの機能を特化した身体能力の象徴化として論じたが、ここでは、スポーツをプレイすることで表出される競技者の身体能力とスポーツ構造との関係に着目することによって、スポーツの発展の特質について論じることとする。

1. 文化の自己累積性

さて、第2章においては、特定の能力が表出されるような行為自体を生みだしていくところに文化の機能があることが指摘されたが、それではこのようにして生みだされた行為は、どのような発展過程をたどるようになるのであろうか。これに関して竹内²⁸⁾は、人間文化の独自性として、

個々の創造的行為が累進化されていくこと、またそれを可能とする構造が存在していることを指摘している。

それでは文化の種概念である言語は、どのようにして個々の創造を累進化しているのでしょうか。この累進化を日本語を例にして考えてみよう。日本語というラングには、日本人が社会生活を営む中で獲得してきた独自の経験が、特定の音のイメージと概念によって蓄積されているが、例えば「兄」という言葉は、そのみで単独で存在しているのではなく、「弟」という言葉の差異として存在している。また、この「兄」「弟」という言葉の差異は、「姉」「妹」という言葉の差異を生みだす契機となっていると考えられる。このように、ラングの中に組み込まれている既存の言葉は、それとの差異によって新たな言葉を産出しつづけているし、そのようにして産出された新しい言葉は、産出と同時にラングの中に組み込まれている。つまり言語は、「差異を用いての差異化行為」(丸山¹⁵⁾)を通して、ある言葉からそれとは異なる新しい言葉を産出し、そしてその産出された新たな言葉を既存のラングの中に組み入れていくことにより、自己累積的に発展しているのである。

このような言語の発展を通して理解されることは、文化の発展は、それぞれの文化領域を構成している構造(ラング)自体の差異的变化と自己累積性という視点から論じられる必要があるということである。

2. スポーツの発展：スポーツ構造の自己累積性と異化

言語が自らの歴史的時間の中で変化しているように、スポーツも自らの歴史的時間の中で変化していると考えられる。例えばバレーボールの歴史を考慮するならば、現代のバレーボールが初期のそれからどれだけ高度な発展を遂げているかが理解されるであろう。またスポーツは、そのような高度化に向かって発展しているだけでなく、いわゆる多様化に向けても発展を遂げている。これに関して多木²⁹⁾(p. 120)は、前者のような同一ス

ポーツ内の変化を「歴史」と呼び、後者のように一つのスポーツが分裂し、いくつかの別のスポーツに増殖していく系統樹的な発展を「進化」と呼んでいる。ここでは、この二つの方向に向けてスポーツが発展していく過程をスポーツ構造との関係の中で明らかにしていくことにする。

まず当該スポーツにおける高度化へ向けての発展は、スポーツ自体の構造が自己累積的に変化することを通して遂行される。それぞれのスポーツにおいては、すでに存在している技や戦術との差異の中から新たな技や戦術が産出され、それらが既存の構造の中に再び組み込まれていくことによって自己累積的に発展している。このことは、例えばバレーボールの発展過程の中で明確に現れている。バレーボールは、既存のAクイックを用いた攻撃形態との差異化からBクイックならびにCクイックという新しい攻撃形態が産出されることによって、またCクイックとの差異化としてDクイックが産出され、その結果、それらがバレーボールの構造の中に組み込まれていくことによって自己累積的に発展してきたという独自の歴史をもっている^{注4)}。

さらにスポーツは、ある一つのスポーツからそれとはまったく別のスポーツが産出されることによっても発展している。既存のスポーツにおいて制度化された、ルール、技、戦術、トレーニング法などは、それとは別の新しいスポーツが産出される際のモデルとして利用される場合がある。例えば、バスケットボールは、それ以前に存在していたアメリカンフットボール、サッカー、ボクシングなどのスポーツをモデルにしながら、それらとの差異化の中から生み出されてきたスポーツとして理解可能であろう¹⁵⁾。コートに対して頭上水平に設定されたバスケットボールのゴール形態は、サッカーやホッケーのゴール形態との差異化の結果として、さらに、どの方向にもパスすることのできるバスケットボールのパス形態は、アメリカンフットボールのパス形態との差異化の結果として、生みだされたと考えることができるであろう。

このように、一つのスポーツの発展を通時的な

視点から見ると、スポーツはそれ自体の歴史の中で蓄積されてきた技や戦術との差異化によって新たな技や戦術が産出され、それと同時に、それらが既存の構造の中に再び組み込まれていくことによって自己累積的に発展していると考えられる。また、あるスポーツの発展を他のスポーツとの共時的な関係の中で論じるならば、スポーツは共時的に存在している既存のいくつかのスポーツがモデルとなり、それとは別の運動様式、スポーツ・ルール、価値観を備えた新しいスポーツ構造が生みだされていく異化の過程を通して発展していると考えられる。そして、この異化によって生みだされたスポーツも、産出されると同時に自己累積的な発展をたどるようになるのである。

3. スポーツ構造とプレイの弁証法

それでは前節で指摘されたスポーツの自己累積的な発展をもたらしている原動力はどこにあるのだろうか。ここではこの原動力をスポーツ構造とそれをプレイする競技者の能力との関係から明らかにしていくことにする。

まず、スポーツの中で表出されたある競技者やコーチの個別的な身体能力および知的能力は、技や戦術として外在化され、それらが他の人々にも共有化されることを通して、伝承されている。この点で Gebauer が指摘しているように、スポーツは共通のプラクシスや集団的で実践的な解釈の「記憶装置 (memory)」(Gebauer⁸⁾ p. 106) であるともいえる。この装置を通して、先行する競技者のプレイ中の身体経験が後続する競技者に開かれていくことで、スポーツは伝承されていく。

ただし、スポーツは単に伝承されているだけでなく、常に変化・発展している。このスポーツの発展過程を佐藤²³⁾は、ある運動文化がある優れた個人の能力を媒介にすることによって新たな運動文化として継承・発展されていく過程として把握している。また高松は、技として客観化されたある個人の身体能力が、別の主体の能力を通して開示され、それと同時に新たな技として再び客観化されていく継続的形成的な発展過程としてスポーツの発展を把握している (高松²⁷⁾ p. 23)。

それでは、この発展過程をスポーツ構造と競技者の能力との関係の中で把握するならば、どのようなのであろうか。すでに論じられたように、ある競技者やコーチの生みだした技や戦術は、単に伝承されるだけでなく、その過程において別の競技者の能力や経験が付け加えられていくことにより、新たな発展を遂げている。その結果、ジンメルが「生の自己疎外 (Selbstentfremdung des Lebens)」(ジンメル²⁵⁾) と名付けた現象がスポーツにおいても生じることになる。つまり、ある競技者が表出した能力は、技や戦術としてスポーツ構造の中に組み入れられ、他の競技者にも利用されることによって、技や戦術の産出者さえも拘束下におくような新たな発展を遂げるようになるということである。この生の自己疎外に対し、競技者およびコーチがこれまでにない技や戦術を開発することによって、スポーツ構造の新たな再構築を促していくこと、そこにスポーツを自己累積的に発展させている原動力が存在していると考えられる。すでに指摘したように、バレーボールの B クイックや C クイックは、われわれの先人が外国チームに勝つために生みだした攻撃形態であるが、これらは産出されると同時にバレーボールの構造の中に組み込まれ、共有化され、多くの選手の能力を媒介にすることで新たな発展を遂げていく。この結果、現在の日本のバレーボール選手は、われわれの先人が生みだした技自体の新たな発展形態の拘束下におかれているのである。日本のバレーボールチームが現在行っている新たな攻撃形態の開発は、このような拘束に対して、再び主導権を獲得するための闘いであり、この中で産出されるであろう新たな攻撃形態は、再びバレーボールの構造の中に組み込まれていくと考えられる。

このように考えていけば、スポーツを自己累積的に発展させている原動力は、ある選手やコーチがプレイの中で表出した身体能力や知的能力を、技や戦術、トレーニング法として外在化することで、技や戦術の産出者あるいは勝者さえも拘束下におくスポーツ構造と、そのスポーツ構造に対し、これまでにない技や戦術、トレーニング法

を開発することによって、新たなスポーツ現象を創りだしていく選手自身のプレイとの弁証法的な関係の中にあるといえよう。

結語：象徴形式としてのスポーツの独自性

本研究は、一般的な文化概念を分析装置にすることによって、スポーツという文化の独自性を、スポーツの構造の生成、機能、発展という側面からそれぞれ論じてきた。議論の要点を整理するならば、以下ようになる。

1) スポーツは、各競技者の身体運動 (Körperbewegung) とともに始まり、それとともに終わる個別的で有限的なプレイとして存在しているだけでなく、その現象の背後にあって、われわれのプレイを特定の身体能力の競い合いに向けて組織したり、それらに一定の意味を与えている客観的で普遍的な構造としても存在している。各スポーツ種目が、それぞれこのような構造として確立され、プレイされるべき対象 (Gegenstand) としてわれわれの前に対峙して存在するようになったとき、はじめてスポーツは成立すると考えられる。われわれがスポーツをプレイすることを通して特定の身体能力だけを競い合うことができるのは、スポーツ構造と呼ばれるべきこの構造を各々のスポーツ種目が有しているからである。

2) スポーツを構造として捉えた場合、われわれがサッカーやバレーボールといった名辞を与えている各スポーツは、それぞれ独自の運動様式、スポーツ・ルール、価値観の各契機が相互に結び付けられた有機的な構造 (システム) を構築している。これらの各契機は、潜在的な形で存在している人間の身体能力と自己の形態にそれぞれ独自の形式を与えることで、それを積極的な形に転化し、表出させている。つまり、スポーツは、人間の中に秘められた身体能力を特化された形式を通して抽象化し、それを比較級や最上級の形で表出 (Ausdruck) させるために機能しており、その点で象徴的な機能を担っている。

3) スポーツは、時代精神や社会的生産力によって規定されながら変化・発展しているだけでなく、「スポーツ構造」を基盤にして考えるなら

ば、「自己累積的」と名付けることができるような変化・発展をしている。この変化・発展の原動力は、競技者の能力とスポーツ構造との間に生じる疎外関係と、それを克服するために競技者が創りだす新たなプレイとの相互関係にある。つまり、技や戦術としてスポーツ構造の中に組み入れられたある競技者の能力は、他の多くの人間の能力を媒介することによって、技や戦術の産出者をも拘束下におくような発展 (生の自己疎外) を遂げるようになるが、これに対して競技者は、新たなプレイ (スポーツ現象) を創りだすことによって、それを克服してきたのである。このようなプレイとスポーツ構造との弁証法的な関係性の中でスポーツは自己累積的に変化・発展しているのである。

このようにスポーツは、その産出者である人間から独立し、自己累積的に変化・発展していく自律的な構造を有することによって、それをプレイする人間の身体能力を最大かつ多様な形で表出しつつつけているという点で、独自の文化的な役割を担っていると考えられる。

付記：本稿の執筆にあたっては片岡暁夫先生 (筑波大学体育科学系)、佐藤臣彦先生 (同) をはじめ、本誌レフェリーの方々からも、様々な御教示をいただきました。記して感謝いたします。

注

注1) Reflexivität は一般的に再帰性と訳されるが、ここでは、ある運動がそれ自体のために行われるという意味で使用されているので、自己目的性という訳語を使用している。

注2) バasketボールの生みの親であるネイスミスの著書の訳者である水谷は、その本のあとがきにおいて、「ネイスミスが、Basketボールを創案し、そののち、Basketボールにたいして、ほんとうに望んでいたものは、いったい、何だったのであろうか。自分の本意ではない方向に、Basketボールは、どんどん発展、いや、変貌していったしまったのかも知れない。」(ネイスミス¹⁹⁾ p. 265) と記している。これはまさに、Basketボール自体がその生みの親であるネイスミスから独立すると同時に、自律的な構造体として

独自の発展を遂げるようになったことを意味している。

注3) 「物理的間隔」ならびに「存在的距離」という用語は、スポーツ空間の特質を記述するために中井が使用している用語である(中井²⁰⁾ p. 396)。

注4) A クイックとの差異の中からB クイックやC クイックが産出されてきた過程については、松平¹⁷⁾の著者を参考になっている。

注5) バスケットボールが既存のスポーツとの差異の中から生みだされてきた可能性については、ネイスミスの著書を参考になっている(ネイスミス¹⁹⁾ p. 55-71)。

文 献

- 1) Cassirer, E. (1939) Naturalistische und humanistische Begründung der Kulturphilosophie. In: Bast, R. A. (Hrsg.) (1993) Ernst Cassirer, Erkenntnis, Begriff, Kultur. Meiner: Hamburg, S. 248.
- 2) カッシーラー: 宮城音弥訳 (1953) 人間. 岩波書店: 東京, pp. 97-98. <Cassirer, E. (1944, 1972) An Essay on Man. An Introduction to a Philosophy of Human Culture. Yale University Press: New Haven and London, p. 69.>
- 3) Franke, E. (1978) Theorie und Bedeutung sportlicher Handlungen. Karl Hofmann: Schorndorf, S. 100.
- 4) Franke, E. (1994) Semiotik des Sports. Eine Übersehene Variante in der Theoriediskussion. In: Friedrich, G. (Hrsg.) Sport und Semiotik. Academia: Sankt Augustin, S. 47-56.
- 5) Gebauer, G. (1973) Logik der Aktion und Konstruktion der Welt. Zur Theorie des Sports. In: Grupe, O. (Hrsg.) Sport in unserer Welt-Chancen und Probleme. Springer Verlag: Heidelberg, New York, S. 580.
- 6) Gebauer, G. (1981) Über Körper-Ideologien. Körper, Handlungen und der Torso der Sportwissenschaft. In: Kutsch, T. u. Wiswede, G. (Hrsg.) Sport und Gesellschaft. Hain: Königstein, S. 125.
- 7) Gebauer, G. (1983) Wettkampf als Gegenwelt. In: Lenk, H. (Hrsg.) Aktuelle Probleme der Sportphilosophie. Karl Hofmann: Schorndorf.
- 8) Gebauer, G. (1994) Sport, Theater, and Ritual. Three Ways of World-Making. Journal of the Philosophy of Sport. Vol. 21: 102-106.
- 9) グートマン: 清水哲男訳 (1981) スポーツと現代アメリカ. TBSブリタニカ: 東京, p. 141.
- <Guttmann, A. (1978) From Ritual to Record. The Nature of Modern Sports. Columbia University Press: New York, p. 85.>
- 10) 樋口 聡 (1994) 遊戯する身体. 大学教育出版: 岡山, p. 186.
- 11) 今道友信 (1971) 同一性の自己塑性. 東京大学出版会: 東京, p. 12.
- 12) 稲垣正浩 (1991) 近代社会のスポーツ. 寒川恒夫編 図説スポーツ史. 朝倉書店: 東京, pp. 130-132.
- 13) 稲垣正浩 (1991) 後近代社会のスポーツ. 寒川恒夫編 図説スポーツ史. 朝倉書店: 東京, pp. 162-164.
- 14) 伊藤高弘 (1986) スポーツの構造と認識. 伊藤高弘ほか編 スポーツの自由と現代 (上巻). 青木書店: 東京, pp. 6-9.
- 15) 丸山圭三郎 (1983) ソシユールを読む. 岩波書店: 東京, p. 300.
- 16) 丸山圭三郎 (1987) 文化=記号のブラックホール. 大修館書店: 東京, p. 105.
- 17) 松平康隆 (1972) 負けてたまるか!. 柴田書店: 東京, pp. 118-150.
- 18) Metheny, E. (1979) The Symbolic Power of Sport. In: Gerber, E. W. and Morgan, W. J. (Eds.) Sport and the Body. Lea & Febiger: Philadelphia, p. 234.
- 19) ネイスミス: 水谷 豊訳 (1980) バスケットボール—その起源と発展—. 日本YMCA 同盟出版部: 東京.
- 20) 中井正一: 久野 収編 (1981) 中井正一全集 1 哲学と美学の接点. 美術出版社: 東京.
- 21) Rigauer, B. (1979) Sport und Arbeit. Lit: Münster, S. 66.
- 22) 佐藤臣彦 (1992) 体育とスポーツの概念的区分に関するカテゴリー論的考察. 体育原理研究 22: 1-12.
- 23) 佐藤臣彦 (1993) 身体教育を哲学する—体育哲学叙説—. 北樹出版: 東京, p. 288.
- 24) ソシユール: 小林英夫訳 (1940, 1972改版) 一般言語学講義. 岩波書店: 東京, pp. 26-27. <Saussure, F. de. (1916, 1978) Cours de linguistique générale. édition critique préparée par Tullio de Mauro, Payot, Paris, pp. 30-31.>
- 25) ジンメル: 茅野良男訳 (1994) ジンメル著作集 9 生の哲学. 白水社: 東京, p. 38. <Simmel, G. (1922) Lebensanschauung, Vier Metaphysische Kapitel, Zweite Auflage. Duncker & Humblot: München und Leipzig, S. 24.>

- 26) 寒川恒夫 (1996) スポーツの未来. —新しいスポーツ文化の胎動— 寒川恒夫監修 写真・絵画集成. 日本スポーツ史(3). 日本図書センター: 東京, pp. 13-15.
- 27) 高松昌宏 (1987) 文化の一形式としてのスポーツの構造に関する一考察—E. カッシーラーの文化論から—. スポーツ教育学研究 7(2): 17-25.
- 28) 竹内芳郎 (1981) 文化の理論のために—文化記号学への道—. 岩波書店: 東京, p. 36.
- 29) 多木浩二 (1995) スポーツを考える—身体・資本・ナショナリズム—. 筑摩書房: 東京.
- 30) 内海和雄 (1986) スポーツと社会発展. 体育原理専門分科会編 スポーツの概念. 不昧堂出版: 東京, p. 31.

(平成8年9月6日受付)
(平成9年5月24日受理)